

高齢期の夫婦共同行動としての消費行動と主観的 well-being

Elderly married people's consumer behavior as a shared activity with their spouse and subjective well-being

鎌田 晶子*・田中 真理**・秋山美栄子***

Akiko KAMADA, Mari TANAKA, Mieko AKIYAMA

要旨：本研究では高齢期の夫婦における消費行動や日常行動を取り上げ、夫婦の共同行動が夫婦の交流、配偶者としてのアイデンティティ、および主観的 well-being に及ぼす影響について、60歳以上の有配偶者 255名（男性 146名、女性 109名）を対象として検討した。高齢期の夫婦共同行動は、一般的にポジティブな影響を与えるが、配偶者アイデンティティや主観的 well-being に影響する余暇の過ごし方は、男女で異なる可能性が示唆された。

キーワード：夫婦、高齢期、共同行動、消費行動、配偶者

序 論

男女とも長寿命化、および核家族化の影響によって、2012年では高齢夫婦のみの世帯が3割を占め今後も増加傾向にあることが言われている（内閣府，2014）。高齢期の夫婦では、現役時代の職業役割や子育てによる親役割を終え、夫も妻も家庭で過ごす時間が長くなり、活動の単位としての「夫婦」の頻度が増加するといえる。幸福な高齢期を送るためには、多くの時間を共有する配偶者との円満な夫婦関係の構築がひとつの重要なファクターとして挙げられるだろう。

夫婦のコミュニケーションの満足度は結婚満足度の予測において重要な要因とされている（たとえば、Jacobson & Moore, 1981）。夫婦での会話時間は、50代から60代にかけて大きな変化が認められ、60代以降会話時間が増大する傾向が認められている（伊藤・相良，2009）。特に男性においては、自己開示の相手として配偶者の役割が大きいことが指摘されており（伊藤・相良・池田，2007）、男性では配偶者への自己開示が主観的幸福感に影響を与えることが示されている（伊藤・相良，2009）。また、60代の男性は退職などの社会役割からの引退後、夫婦における配偶者役割が変化し家事参加が増大するため（伊藤・相良，2009）、高齢期は家庭内での配偶者役割の重要性もより高まることが予想される。一方で、役割関係について夫と妻とで大きな差

* かまだ あきこ 文教大学人間科学部

** たなか まり 客員研究員・東京成徳大学

*** あきやま みえこ 文教大学人間科学部

が認められることも報告されている（伊藤・相良，2010）。

高齢期の夫婦においては、配偶者としての役割意識や日々の幸福感や人生満足度に、夫婦での共同行動が及ぼす影響が大きいと考えられる。伊藤・相良（2012）では、退職世代では夫婦の共同行動が夫婦満足度に寄与することが示されているが、具体的に夫婦でどのような共同行動を行うことが高齢期の主観的な幸福感に結びつくのかを検討する必要があるだろう。夫婦での共同行動として、家事行動、社会的活動や消費行動等が挙げられるが、高齢者の消費に対する意欲は高く、例えば高齢者の約4割が「買い物や旅行」を生きがいとしているという調査報告もある（越谷市，2010）。高齢者にとって夫婦での消費行動は、活動的かつ自立したセカンドライフを楽しむことにつながるだろう。

そこで本研究では、高齢期の消費行動を中心とした夫婦の共同行動が、夫婦のコミュニケーションや家庭内での役割意識、生活満足度や幸福感に与える影響について検討する。これまでの研究から、性別によって異なる傾向が予測されることから（伊藤・相良，2009など）男女別に検討を加えることとする。

目 的

本研究では高齢期の夫婦を対象に、買い物に関する行動・心理的な特徴について検討するとともに、夫婦が共同で行う消費行動や日常行動を取り上げ、夫婦の交流や配偶者アイデンティティ、および高齢者の主観的 well-being に及ぼす影響について検討することを目的とする。

方 法

(1) 調査対象者

埼玉県および千葉県内に在住の中高年者に調査票を配布し回答を依頼したところ 496 名から協力を得た。本研究では、60 歳以上、有配偶者でかつ回答に不備がない 255 名（男性 146 名、女性 109 名）を分析対象者とした。平均年齢は 68.05 歳（SD = 4.97）であり、年齢範囲は 60-86 歳であった。有職者は男性 19 名（13.0%）女性 37 名（33.9%）であり、全体で 56 名（22.0%）であった。配偶者が入院中などの理由で別居している 3 名を除き 252 名が配偶者と同居しており、159 名（62.4%）が夫婦のみの世帯であった。

(2) 調査手続き

個別無記名式の質問紙法を実施した。シニア大学等の社会参加活動の開催場所にて調査票を配布し、各自持ち帰っての記入を求めた。記入後の調査票については後日回収した。また、期間内に調査票を回収できない場合には、その場での回答を求めた。実施期間は、2013 年 11 月から 12 月であった。

(3) 倫理的配慮

調査票の表紙に研究趣旨を説明する文章を記載した。また、研究協力は任意であること、協力しないことによって何らかの不利益を被らないこと、データは数値化され統計的に処理されるため誰がどのように回答したかについて特定されることがないことを記した。表紙の注意書きをよ

く読むように促し、調査票の提出をもって調査協力に同意したとみなした。

(4) 調査項目

個人の消費行動の指標：日常生活において食料品などの買い物に行く頻度、普段行く店舗までの距離、買い物が好きかどうか、買い物に満足しているかどうか、買い物を負担に感じているかどうかの5項目について、項目内容に合わせて頻度や程度を尋ねる形式で、5件法から8件法での回答を求めた。

夫婦の交流指標：一日あたりの夫婦の共有時間について数字で記入する形式で回答を求め、夫婦の会話時間については「1. ほとんどない」「2. 30分以下」「3. 30分～1時間」「4. 1～2時間くらい」「5. 2時間以上」の5件法で回答を求めた。さらに、夫と妻の会話の割合についても数字を記入する形式で回答を求めた。

夫婦共同行動の指標：伊藤・相良（2012）の4項目（「買い物」「外食」「旅行」「趣味活動」）に2項目（「自宅での食事」「家事」）を加えた計6項目について、夫婦二人で一緒にすることがどの程度あるのか「1. ほとんどない」「2. たまにある」「3. 時々ある」「4. よくある」の4件法で回答を求めた。

配偶者への自己開示の指標：伊藤・相良（2012）の6項目（「最近嬉しかったこと、楽しかったこと」「腹が立ったり、疑問に思ったこと」「自分の趣味や活動にかかわること」「互いの健康」「家計のこと」）に2項目（「世間話」「共通の友人や知人のこと」）を加えた計8項目について、普段配偶者に話したり相談したりすることがどの程度あるのか「1. まず話さない」「2. 話したことがある」「3. 時々話す」「4. よく話す」の4件法で回答を求めた。

配偶者アイデンティティの指標：中原（2011a）の祖父母アイデンティティ尺度を参考に、祖父母を配偶者に置き換え、表現を若干変更して作成した。「夫・妻としてのわたしは…」に続く文として、10対の形容詞対（「活動的だ—活動的でない」「うまくやっている—うまくやっていない」「有能である—有能でない」「くつろいでいる—くつろいでいない」「幸せだ—幸せでない」「自信がある—自信がない」「あたたかい—つめたい」「開放的だ—閉鎖的だ」「他者に関心がある—自分に関心がある」「社会的である—孤独である」）に5件法で回答を求めた（例えば、「活動的—活動的でない」であれば「かなり活動的、やや活動的、どちらでもない、やや活動的でない、かなり活動的でない」の5つのうち最も自分自身に近いものひとつに○をつけるよう求めた）。なお得点が高いほどアイデンティティへの評価がポジティブになるように得点を算出した。

感情的 well-being の指標：中原（2011b）の感情的 well-being 尺度からポジティブ感情6項目（「元気だ」「気分がいい」「とても幸せだ」「落ち着いていて、穏やかだ」「満足している」「活気に満ちている」）およびネガティブ感情6項目（「自分には価値がないと思う」「全てが骨折り損であると感じる」「絶望している」「落ち着かない、そわそわする」「緊張で神経が高ぶっている」「悲しすぎて、何をしても元気が出ない」）の計12項目について、この1ヶ月間にどの程度感じたかを「1. 全く感じなかった」「2. 一、二度感じた」「3. 時々感じた」「4. しばしば感じた」「5. いつも感じた」の5件法で回答を求めた。

生活満足度の指標：古谷野・柴田・芳賀・須山（1990）のLSIK（Life Satisfaction Index K）の9項目（「あなたは去年と同じように元気だと思いますか」「最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか」「あなたの人生は、ほかの人に比べて恵まれていると思いますか」

「生きることは大変厳しいことだと思いますか」「物事をいつも深刻に考えるほうですか」「これまでの人生で、あなたは求めていたことのほとんどを実現できたと思いますか」「あなたは、年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか」「全体として、あなたの今の生活に、不幸なことがどれくらいあると思いますか」「あなたの人生をふりかえてみて、満足できていますか」を用いた。回答は質問内容に応じて2件法もしくは3件法であった。

さらに、調査票では自分と配偶者の家事行動量について15項目4件法で評定を求めたが、本研究の分析には用いなかった。フェイスシートとして、性別、年齢、同居家族の有無、仕事の有無を尋ねた。

なお、解析にはSPSS 20を用いた。

結果と考察

(1) 個人の買い物行動

個人の買い物頻度では、男性女性とも週2、3回が最も多く見られた（男性43.1%、女性48.1%）。2番目に多い回答は、男性では週1回（22.2%）女性では週4、5回（29.6%）であり、女性の方が買い物に行く頻度が多い傾向にあるといえるだろう。普段行く店舗までの距離は、「とても近い」と「まあまあ近い」の回答を合わせると男性65.1%、女性69.7%と7割近くに及び、本研究の対象者には近隣に買い物のできる環境が整っていることがわかる。買い物が好きかについては、男性では「普通」との回答が最も多く64.4%であった。一方、女性でも「普通」との回答が48.6%と最も多かったが、「好き」も41.3%と次いで多く認められた。普段の買い物に満足している程度としては、男性は「普通」（61.0%）に次いで「満足」（29.5%）の回答が多く、同様に女性も「普通」（54.1%）に次いで「満足」（34.9%）の回答が多く認められ、不満足を示す回答は少なかった（男性7.5%、女性11.0%）。買い物に対する負担感についても、男性は「あまり負担でない」との回答が41.1%で最も多く、次いで「普通」との回答が38.4%であり、女性では「普通」（39.4%）に次いで、「あまり負担でない」が33.0%であった。これらの結果から、本研究の対象者は日常生活における買い物に関して特段の不満や負担感は少なく、概ね買い物しやすい環境で生活しているといえるだろう。

買い物が好きかどうか、買い物への満足度、買い物での負担感について、それぞれ強く感じているほど高得点となるように得点化し平均値を求めた。買い物好きが男性3.21点（SD = .72）女性3.52点（SD = .70）、満足度が男性3.25点（SD = .64）女性3.24点（SD = .64）、負担感が男性2.39点（SD = .83）女性2.70点（SD = .94）であり、対応のない t 検定の結果、買い物好きと負担感に有意な男女差が認められた。（買い物好き： $t(253) = 3.51, p < .001$; 満足度： $t(253) = .18, ns$; 負担感： $t(253) = 2.77, p < .01$ ）。これらのことから、男性に比べて女性の方が買い物の好きな傾向がある一方で、買い物に負担感も感じがち傾向が示された。

(2) 夫婦の行動・心理

2-1 共有時間と会話

夫婦で共に過ごす時間について0時間から24時間までの回答が認められたが、平均値は男性では8.5時間（SD = 5.89）、女性では9.5時間（SD = 6.20）であり、最頻値は男性では6時間、女性では10時間であった。夫婦の会話時間について、男女共に2時間以上との回答が最も多く

認められた（男性 33.6%，女性 31.2%）。夫と妻の会話の割合について、それぞれ平均値を求めたところ、男性は夫が 3.9 割（SD = 1.80）妻が 6.0 割（SD = 1.90）、女性は夫が 4.2 割（SD = 1.86）妻が 5.5 割（SD = 1.93）であった。対応のある t 検定の結果、男女とも女性が話している割合が多いと判断していることが示された（男性： $t(145) = 7.33, p < .001$ ；女性： $t(109) = 3.91, p < .001$ ）。共有時間と会話時間について Spearman の相関係数を求めたところ、男女ともに有意な正の相関係数が認められ、共有時間が長くなるほど会話時間も増える傾向が認められた（男性： $\rho = .40, p < .001$ ；女性： $\rho = .45, p < .001$ ）。会話時間と会話の割合についても同様に Spearman の相関係数を求めたところ、男性において会話時間が長くなるほど夫の会話割合が増加する弱い傾向が認められたが（男性：夫 $\rho = .22, p < .01$ ；妻 $\rho = -.11, ns.$ ）、女性においては有意な係数は得られなかった（女性：夫 $\rho = .17, p < .10$ ；妻 $\rho = -.001, ns.$ ）。

2-2 夫婦共同行動

各項目の回答の割合と、「ほとんどない（1点）」～「よくある（4点）」として得点化した平均値と SD を男女別に表 1 に示す。

買い物については夫婦で出掛けるという回答が最も割合が大きく、外食や旅行についても時々もしくはたまに出掛けるとの回答が共に 3 割程度と最も多く認められた。このように買い物、外食、旅行のような夫婦での消費行動は、8 割から 9 割の夫婦が経験していることが示された。一方、趣味や活動については「ほとんどない」との回答が 4 割近く最も多く、「よくある」と答えた者は 1 割に満たなかった。自宅での食事については、ほとんどの者が自宅で食事を摂っており、日常的に夫婦で共に食事をする者が多いことが示された。家事については、女性では「ほとんどない」から「よくある」まですべて 20% 台の値を示し、男性の場合は「時々ある」との回答が最も多く認められた。

ほぼすべての項目間において有意な正の相関が認められ、夫婦共同行動 6 項目の信頼性係数は $\alpha = .73$ であった。

表 1 夫婦共行動の頻度（%）と、平均値と SD

	買い物		外食		旅行		趣味や活動		自宅での食事		家事	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
ほとんどない	6.8%	11.9%	6.8%	9.2%	15.1%	17.4%	<u>35.6%</u>	<u>39.4%</u>	2.1%	2.8%	15.1%	21.1%
たまにある	20.5%	26.6%	29.5%	<u>32.1%</u>	25.3%	<u>30.3%</u>	29.5%	<u>31.2%</u>	3.4%	1.8%	24.0%	22.0%
時々ある	<u>35.6%</u>	26.6%	<u>35.6%</u>	<u>33.9%</u>	<u>32.2%</u>	29.4%	27.4%	21.1%	9.6%	4.6%	<u>36.3%</u>	28.4%
よくある	<u>37.0%</u>	<u>34.9%</u>	28.1%	24.8%	27.4%	22.9%	7.5%	8.3%	<u>84.9%</u>	<u>90.8%</u>	24.7%	28.4%
平均値	3.03	2.84	2.85	2.74	2.72	2.58	2.07	1.98	3.77	3.83	2.71	2.64
SD	.92	1.04	.91	.94	1.03	1.03	.97	.97	.61	.59	1.01	1.11

30%以上の数値に下線

2-3 配偶者への自己開示

配偶者への自己開示 8 項目の信頼性係数は $\alpha = .77$ であり、十分な内的整合性が認められたため、すべての項目得点を加算し配偶者への自己開示得点とした。得点を男女別に算出したところ、男性は 23.51 点（SD = 4.55）女性は 25.58 点（SD = 5.75）であり、対応のない t 検定の結果、有意な差異が認められた（ $t(199.9) = 3.10, p < .01$ ）。このことから男性に比べて女性の方が配偶者に対する自己開示を行う傾向が強いことが示された。この結果は、伊藤・相良・池田

(2007) の子育て期や中年期の夫婦の自己開示傾向と類似しており、高齢期であっても一貫して女性に比べて男性の方が自己開示しにくい傾向が認められた。

2-4 配偶者アイデンティティ

配偶者アイデンティティの 10 項目の信頼性係数は $\alpha = .91$ であり、十分な内的整合性が認められたため、すべての項目得点を加算し配偶者アイデンティティ得点とした。得点を男女別に算出したところ、男性は 37.32 点 (SD = 6.09) 女性は 37.63 点 (SD = 6.16) であり、対応のない t 検定の結果、有意な差異が認められなかった ($t(253) = .41, ns.$)。

(3) 主観的 well-being

3-1 感情的 well-being

感情的 well-being のポジティブ尺度 6 項目の信頼性係数は $\alpha = .90$ 、ネガティブ尺度 6 項目の信頼性係数は $\alpha = .80$ であり、十分な内的整合性が認められたため、尺度ごとに項目得点を加算しポジティブ感情得点およびネガティブ感情得点とした。ポジティブ感情得点について男女別に算出したところ、男性は 22.69 点 (SD = 4.42) 女性は 22.49 点 (SD = 5.29) であり、対応のない t 検定の結果、有意差は認められなかった ($t(253) = .34, ns.$)。ネガティブ感情得点について男女別に算出したところ、男性は 9.17 点 (SD = 3.17) 女性は 9.22 点 (SD = 3.58) であり、対応のない t 検定の結果、有意差は認められなかった ($t(253) = .12, ns.$)。

3-2 生活満足度

LISK の 9 項目の信頼性係数は $\alpha = .67$ であり、2 件法もしくは 3 件法の尺度としては十分に内的整合性が認められると判断されたため、すべての項目得点を加算し生活満足度得点とした (得点範囲: 0 点 ~ 11 点)。得点を男女別に算出したところ、男性は 5.15 点 (SD = 2.06) 女性は 5.08 点 (SD = 2.13) であり、対応のない t 検定の結果、有意な差異が認められなかった ($t(253) = .26, ns.$)。

(4) 夫婦共同行動と買い物行動・心理の関連

夫婦が自宅で食事を摂る頻度と買い物の頻度について、自宅で一緒によく食事をする人の約半数 (男性 38.9%、女性 46.3%) が週 2、3 回の頻度で買い物に行くと回答しており、男女とも自宅で食事する人ほど頻繁に買い物に行く傾向があるわけではないことが示された。一方で、自宅での食事の頻度と買い物の負担感の相関係数に男女差が認められ (男性 $r = -.03$, 女性 $r = -.26$; $\chi^2(1) = 5.19, p < .05$)、高齢期の自宅での食事は、女性にとって買い物の負担感を上昇させる傾向が認められた。また、夫婦共同行動としての買い物の頻度と買い物が好きかどうかにも、男女間で相関係数に差が認められ (男性 $r = .27$, 女性 $r = -.03$; $\chi^2(1) = 5.62, p < .05$)、買い物が好きな男性は夫婦で買い物をする頻度が高い傾向があるのに対し、女性では買い物好きと夫婦での買い物の頻度には関連がないことが示された。

これらのことから、夫婦が自宅で食事を摂る回数が多いほど、買い物に出掛ける回数が上昇するわけではないが、女性にとっては買い物の負担感が上昇する傾向が認められた。また、先の結果から、男性より女性の方が買い物自体を好む傾向が認められるのに対し、男性は夫婦で行う買い物を好ましいと感じている傾向が示唆された。

(5) 夫婦共同行動と夫婦の会話

先の結果から、共有時間が増えると会話時間も増える傾向が示されたが、共有時間の過ごし方のひとつとして共同行動を取り上げ検討した。共有行動と夫婦共同行動と会話時間の関連について、ピアソンの積率相関係数を算出したところ、自宅での食事 ($r = .27$) や家事 ($r = .28$) などの日常行動を共にすることで、話す時間が長くなる傾向が認められた。さらに、外食 ($r = .34$)、旅行 ($r = .41$)、買い物 ($r = .45$) のように一緒に外出するほど会話時間が長い傾向がより強くなることが示された。また、趣味や活動 ($r = .47$) を共同で行うことには、さらに強い相関が認められた。これらのことから、夫婦での共同行動が夫婦の会話を促進する傾向があるが、外出を伴う行動や複雑な作業を伴う行動においてより会話時間が増える傾向があると推察された。

(6) 夫婦共同行動が配偶者への自己開示に与える影響

高齢期の夫婦のどのような共同行動が配偶者への自己開示に影響するのかを検討するため、共同行動の6項目を独立変数、配偶者への自己開示を従属変数とし、男女別にステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。夫婦共同行動と配偶者への自己開示の相関係数 (r) および重回帰係数 (β) を表2に示す。男女ともに、外食および自宅での食事において、また、趣味や活動において有意な正の係数が得られた。これらのことから、夫婦で食事を摂ることや趣味や活動を行うことが配偶者への自己開示を高めることが示された。食事の際の会話が自己開示につながるものが考えられるだろう。また、趣味や活動を通じた共通の経験が夫婦の会話を豊かにすることも考えられる。

表2 夫婦の共同行動を独立変数、配偶者への自己開示を従属変数とした重回帰分析結果 (男女別)

独立変数	従属変数	配偶者への自己開示			
		男性 (r)	男性 (β)	女性 (r)	女性 (β)
買い物		.36**	—	.34**	—
外食		.43**	.30**	.40**	.29**
旅行		.41**	—	.40**	—
趣味や活動		.38**	.27**	.35**	.21*
自宅での食事		.30**	.19*	.23*	.19*
家事		.27**	—	.24*	—
	R^2		.29**		.23**

* $p < .05$, ** $p < .01$

(7) 夫婦共同行動が配偶者アイデンティティに与える影響

高齢期の夫婦のどのような共同行動が配偶者アイデンティティに影響するのかを検討するため、共同行動の6項目を独立変数、配偶者アイデンティティを従属変数とし、男女別にステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。夫婦共同行動と配偶者アイデンティティの相関係数 (r) および重回帰係数 (β) を表3に示す。男女ともに家事において、また、男性では外食と旅行において、女性では趣味や活動において有意な正の係数が得られた。これらのことから男女ともに、夫婦と一緒に家事を行うことが配偶者アイデンティティを高めることが示された。ま

た、男性の場合は妻との外食や旅行に出掛けることが、女性の場合は夫と趣味や活動を行うことが配偶者としての自分に対するポジティブ評価につながるということが明らかになった。

表3 夫婦の共同行動を独立変数、配偶者アイデンティティを従属変数とした重回帰分析結果（男女別）

独立変数	従属変数			
	配偶者アイデンティティ			
	男性 (r)	男性 (β)	女性 (r)	女性 (β)
買い物	.30**	—	.28**	—
外食	.36**	.21*	.27**	—
旅行	.34**	.20*	.34**	—
趣味や活動	.31**	—	.42**	.37**
自宅での食事	.21*	—	.21*	—
家事	.32**	.27**	.34**	.27**
	R^2		.23**	.24**

* $p < .05$, ** $p < .01$

(8) 夫婦共同行動が主観的 well-being に与える影響

高齢期の夫婦のどのような共同行動が主観的 well-being に影響するのかを検討するため、共同行動の6項目を独立変数、主観的 well-being を従属変数とし、男女別にステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。夫婦共同行動と配偶者アイデンティティの相関係数 (r) および重回帰係数 (β) を表4に示す。決定係数 (R^2) が十分に大きな値ではなかったが、感情的 well-being において、ポジティブ感情では、男性は外食と家事、女性は旅行に有意な正の係数が得られた。このことから男性と女性ではポジティブ感情に与える夫婦共同行動が異なっており、男性は夫婦で外食や家事をすること、女性は夫婦で旅行に行くことによって well-being 感情が高まる可能性が示された。ネガティブ感情については、男女とも有意な係数は得られなかった。生活満足度についても同様に、決定係数 (R^2) があまり大きな値ではなかったが、男性では外食、女性では旅行に有意な正の係数が得られた。これらのことから、妻と家事を行う男性はポジティブ感情が高く、さらに消費行動の側面から見ると、夫婦での行動として男性には外食、女性には旅行が日々の暮らしの中でのポジティブ感情や人生への満足度の向上に寄与することが示唆された。

表4 夫婦の共同行動を独立変数、主観的 well-being を従属変数とした重回帰分析結果（男女別）

独立変数	ポジティブ感情				ネガティブ感情				生活満足度			
	男性 (r)	男性 (β)	女性 (r)	女性 (β)	男性 (r)	男性 (β)	女性 (r)	女性 (β)	男性 (r)	男性 (β)	女性 (r)	女性 (β)
買い物	.19*	—	.07	—	-.10	—	-.14	—	.21**	—	.23**	—
外食	.25**	.22**	.10	—	-.06	—	-.05	—	.24**	.22**	.19*	—
旅行	.22**	—	.27**	.27**	-.16	—	-.12	—	.21*	—	.39**	.35**
趣味や活動	.24**	—	.25**	—	-.10	—	-.19	—	.21**	—	.36**	—
自宅での食事	.08	—	.11	—	.00	—	-.19*	—	.04	—	.20*	—
家事	.22**	.19*	.14	—	-.15	—	-.06	—	.19*	—	.25**	—
	R^2		.10**	.07*	—	—	—	—	R^2		.08**	.18**

* $p < .05$, ** $p < .01$

(9) まとめ

退職後の夫婦共同行動は、夫婦の関係満足度を上昇させることが報告されているが（伊藤・相良、2012）、本研究においては、高齢期の男女ともに夫婦で食事を摂ることや趣味や活動を行うことが配偶者への自己開示を高めることが示された。特に男性にとっては、配偶者が特に重要な自己開示の相手となることから（伊藤・相良・池田、2007）、夫婦での共同行動の場が重要なコミュニケーション場面として機能するだろう。

男女ともに夫婦と一緒に家事を行うことが配偶者アイデンティティを高めることが明らかになった。また、妻と家事を行う男性はポジティブ感情が高い傾向が示されたことから、高齢男性にとって妻と共に積極的に家事に関わることが、家庭内での有能感や活動性を高め、穏やかで幸せな気持ちにつながる可能性が考えられる。

さらに、消費行動の側面から見ると、夫婦での行動として男性には外出、女性には旅行が、日々の暮らしの中でのポジティブ感情や人生への満足度の向上に寄与することが示された。高齢期の夫婦共同行動は全般的にポジティブな影響を与えるが、配偶者アイデンティティや主観的 well-being に影響する余暇の過ごし方は、男女で異なる可能性が示唆された。

本研究は男女別の分析を中心に行ったが、夫婦の相互の関係については検討できていない。今後は夫婦を一組とした検討が必要になると考えられる。

引用文献

- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男（1990）生活満足度尺度の構造—因子構造の不変性— 老年社会科学 12, 102-106.
- Jacobson, N. S. & Moore, D. (1981) Spouses as observers of events in their relationship. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 269-277.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子（2007）夫婦のコミュニケーションが関係満足度に及ぼす影響：自己開示を中心に 文京学院大学総合研究所紀要 9, 1-15.
- 伊藤裕子・相良順子（2009）中高年期における夫婦の関係と心理的健康：世代比較を中心に 文京学院大学総合研究所紀要 10, 191-204.
- 伊藤裕子・相良順子（2010）中年期から高齢期における夫婦の役割意識：個別化の観点から 文京学院大学総合研究所紀要 12, 163-176.
- 伊藤裕子・相良順子（2012）愛情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討：中高年き夫婦を対象に 心理学研究 83 (3), 211-216.
- 越谷市（2010）「第4期越谷市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」総論 第2章 Pp11-37.
- 内閣府（2014）平成26年度版高齢社会白書
- 中原純（2011a）前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係 心理学研究 82 (2), 158-166.
- 中原純（2011b）感情的 well-being 尺度の因子構造の検討および短縮版の作成 老年社会科学 32 (4), 434-442.

本研究は、文教大学大学院共同研究費の助成を受けて行われた。本研究の一部は、日本心理学会第78回大会および日本老年行動科学会第17回東京大会にて報告された。